Fons Sapientiae

仙台白百合女子大学図書館報 「フォンス サピエンティエ」

No.22
2022.4.1

Contents

・より良い図書館をつくるための懇談会
・教員の近刊単・共著の紹介
・推薦図書
・新着図書紹介
・図書館が行ったコロナウィルス対策の概要および環境整備の取り組み
・編集後記

より良い図書館をつくるための懇談会

図書館では、魅力ある図書館にするため、学生の自由闊達な意見を伺う場として、今年で3回目となる「より良い図書館をつくるための懇談会」を開催しました。

今回も各学科の学生に集まって頂き、沢山の意見を賜わりました。

日　時：2022年1月12日（水）12：20～12：50
場　所：321室（3号館2階）
参加者：学生7名、教職員6名　計13名

●参加者名簿（敬称略）

学　生		教職員
人間発達学科	健康栄養学科	大本　　泉（図書館長、GS学科教授）
佐藤　愛華（2年）　大槻　一葉（1年）	河上　美春（2年）　川島みなみ（2年）	岡　敬一郎（図書委員、人間発達学科教授）
心理福祉学科	グローバル・スタディーズ学科	志水田鶴子（図書委員、心理福祉学科准教授）
馬場　咲希（3年）	大江　叶夏（2年）　梅津明日美（1年）	鈴木　寿則（図書委員、健康栄養学科准教授）
		石岡　宏美（事務局次長、図書館事務長）
		谷藤　大介（図書館主任）

●学生からの意見

（良い点）

意　見	回　答
2Fのソファーが良かった。図書館を長時間利用するので。1年生もソファーを利用している。	引き続き、良い空間づくりにチャレンジします。
ソファーを利用していて、新刊の本棚の隣にあるので便利である。	
ソファーがあって良かった。また新刊が多いので本好きには利用しやすく有難い。	
本の数が多く場所が判らないとき等、図書館員が教えてくれて有難い。	いつでも問い合わせ願います。
静かな空間で集中できた。資料も多く快適な空間でいいと思う。	有難うございます。
新刊本の3日貸出は短いので、長期休みには1週間の貸出となって嬉しかった。	長期休みに合わせ、貸出期間を延ばしました。
去年と比べて雑誌の数が増えたと思う。	雑誌は毎年見直しを行い、より良い誌面を揃える様努力しております。
新書が多い所や勉強しやすい雰囲気が良かった。	引き続き、より良い空間づくりにチャレンジします。

（改善点）

意　見	回　答
DVDを週末だけでも貸出しを行うと、DVD利用が増えると思う。	現行では、著作権法により公共図書館以外の、大学を含む学校等の図書館や専門図書館等でのDVD貸出ができません。館内利用をお願いします。
DVDが借りられるようになると嬉しい。	
スマートフォンで調べるので、コンテンツを増やしてほしい。	図書館ホームページの拡充に努めます。
図書館を長時間使いたいので飲食のスペースが欲しい。	飲み物に関しては、ペットボトルを含む蓋つきの飲み物で、匂いのない物に限り館内で飲むことができます。 食べ物に関しては、館内ではご遠慮頂いておりますが、図書館入口脇のテーブルや、入口前ウッドデッキにあるテーブルなどをご利用ください。
飲食できるスペースが欲しい。館内は飲み物だけなので、小腹が空いた時ちょっと残念。	
静かで自習しやすいが、ちょっと硬いイメージがある。たくさん資料があるので、皆で話し合ったり、食べながら利用できるスペースを作って、来やすく、柔らかいイメージにしてほしい。	
夏、蜂が多く怖い。	山林に近く、また扉の開閉時に侵入する場合がありますので、図書館員にお知らせ願います。
図書館への道のりが大変。夏はいいが冬の吹雪の時などは大変。	3号館2階からも入館可能です。積雪時は除雪を行う等努めて参ります。
1号館の廊下や他の建物にも本があれば個人的に見ることができて良いと思う。	蔵書の管理上、館外別置は難しいと思われますが、5号館4階のカトリック研究所にも蔵書がございます。 今後は、掲示やホームページ等による情報提供に尽力したいと思います。
いつもリクエストしているが、映画・美術・サブカル関係の本が少なく古い。	蔵書の弱い分野を補いたいと存じます。引き続き、お勧めの本をお知らせ願います。
名作の本（楽芽などの）は古いので拭いてほしい。	手入れが行き届かず申し訳ございません。早速、清掃しました。
本を探すとき、探したい本がどこにあるか、簡略的な図があると判りやすい。	分かり易い案内図を掲示したいと思います。また、パソコンでの蔵書検索もご活用願います。

教員の近刊単・共著の紹介

『高校生のための思索ノート ～アンソロジーで紡ぐ思索の旅～』　髙橋 正人 著　コールサック社

人間発達学科　特任教授　**髙橋　正人**

本書は、新学習指導要領による新しい科目編成がなされた高等学校国語科を射程に入れながら、生涯にわたって読書を通して思考を深めるための一助として作成されたアンソロジーである。取り扱っているのは、小・中・高等学校の国語科教科書の教材を始め、筆者の幅広い読書及び映画鑑賞等に基づいた作品であり、一つ一つの作品をもとにして、その作品から汲み取ることができる様々なテーマを深めることにより、作品が新たな相貌をもって立ち現れてくる過程が探究的な学びと連動している。

本書で取り上げられている作品は、是枝裕和『ヌガー』、川上弘美『神様 2011』、石沢麻依『貝に続く場所にて』、夏目漱石『夢十夜』、新美南吉『ごんぎつね』、アーノルド・ローベル『お手紙』、斎藤隆介『モチモチの木』、立松和平『海のいのち』、ヘルマン・ヘッセ『少年の日の思い出』(Jugendgedenken)、永島慎二『漫画家残酷物語』、映画『トゥルーマン・ショー』、小津安二郎監督作品『東京物語』、清岡卓行『手の変幻』、吉田とし『きみはその日』、ジェラール・ド・ネルヴァル『シルヴィ』、文部科学省『学習指導要領解説』などである。

今後、幼・小・中・高等学校において探究型の深い学びが求められ、園児・児童・生徒一人一人にとって思索を重ねることの重要性が増すことから、前著『文学はいかに思考力と表現力を深化させるか―福島からの国語科教育モデルと震災時間論』とともに、本書が高校生はもとより多くの学生の皆さんに読まれることを期待したい。

『東日本大震災と社会教育』　日本社会教育学会 著　東洋館出版社

グローバル・スタディーズ学科　教授　**小形 美樹**

東日本大震災とそれに伴う原発事故は、未曽有の災害を引き起こした。この事態に直面し、日本社会教育学会は特別プロジェクトを組織し、東日本大震災が社会教育に与えた影響と震災から復興の過程における社会教育の役割について研究に取り組んだ。本書にはその研究成果が収録されている。

筆者（小形）は高橋保幸氏（当時:東北大学大学院）と、第８章「被災女性にとっての職業訓練の意義と役割」を執筆した。震災直後の職業訓練が、被災した女性求職者にとってどのような意義と役割があったかを、インタビュー調査から考察したものである。通常、求職者が職業訓練を受ける目的は、就職に結びつく知識や技術を身につけることにあるが、被災した女性求職者は、職業訓練にピア・サポート（仲間による支え合い）と生活リズム定着の場という意義と役割を見出しており、積極的に職業訓練にいざなうことが、被災求職者の心身両面を支えていくと明らかになった。なお、令和２年度にグローバル・スタディーズ学科特任教授として教鞭を執られた高橋満先生が、「はしがきにかえて」部分を担当され、第６章「学習経験と震災ボランティア」（蔦島修治氏との共著）も執筆されている。

持続的社会づくりや地域のコミュニティーについて考えるきっかけになると思われるので、ぜひお読みいただきたい。

推薦図書

『野の医者は笑う 心の治療とは何か？』　東畑 開人 著　誠信書房

人間発達学科　特任講師　**八木 孝憲**

世の中には一見怪しくて「これって本当に大丈夫なの？効果はあるの？」と思われる治療法や言説が沢山ありますよね。おまじない、ヒーリング、イタコ、霊媒などなど、誰もが聞いたことがあったり興味を抱いている人もいるかもしれません。実際に世の中にはそういった「我々にはよく分からないけれど、なんだか効果があるらしい」というものは、身近に溢れています。情報化社会でよりいっそう可視化され、あらゆる媒体で見聞きする機会も増えてきているようです。心の問題に限らず、医療をはじめさまざまな分野で科学的根拠を重視する姿勢は、これまでもこれからも続いていくでしょう。けれども、それと並行してこういった「よく分からないけれども、何だか良いらしい」という野の医者が行う治療なども、ある種の文化として綿々と受け継がれていくのだろうという側面もあるようです。

本書は、誰しも怪しいと感じたり眉唾だろうと思っているようなおこないや事象について、医療人類学、臨床心理学、精神医学などの知見と時に比較しながら、とってもユーモア溢れる語り口で切り込んでいく新規性に富んだものとなっています。専門書というよりはむしろユーモア小説として十分に読み応えのあるものとなっています。

科学的根拠って？　エビデンスって？　ということをも再考させてくれる良書だと思います。

『ケアの本質 －生きることの意味－』　ミルトン・メイヤロフ 著／田村 真・向野 宣之 訳　ゆみる出版

心理福祉学科　講師　**三浦 和夫**

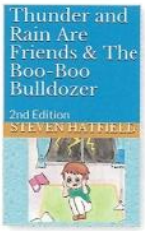
「ケアすること」というのは、どういうことなのでしょうか。「ケア」を辞書などで調べてみると、一つの意味として「世話をする」とあります。私自身も「ケア」の意味を「誰かの世話をする」という意味で理解していたように思います。しかし、この本と出会い、「ケア」に対する新たな考え方を知ることができました。

著者は、「ケアすること」について、「その人が成長すること、自己実現することをたすけることである」、また、「他の人々をケアすることをとおして、他の人々に役立つことによって、その人は自身の生の真の意味を生きているのである」と述べています。おそらく、私たちは、他の人々の成長や自己実現を促し、他の人々との関係を通して自分自身の生きる意味を確認しているのだと思います。また、「ケアすること」は、人間関係における上下の関係ではなく、お互いに成長し発展していく関係を示しており、とても重要な考え方であることに改めて気づかされました。

この本は、とても読みやすく、「ケアすること」の意義を考える機会になるとともに、人と関わる際の参考にもなると思います。

『Toothbrushing Stories』 Steven Hatfield 著

グローバル・スタディーズ学科　特任教授　スティーヴン・ハットフィールド



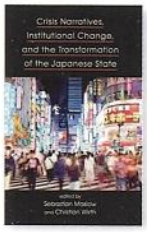
When my son Eugene was a toddler, he didn't want his teeth brushed. He would fight a lot, and it was a challenging process. My wife told Eugene a story about her dog Merry as she brushed his teeth one day. It was difficult for him, but he could better tolerate the brushing process. Every day, Eugene and I were going on imaginary bus and train rides to places all around the world in our play. One day, I had the idea of telling him a story related to our imaginary playtime during his toothbrushing. He was enthralled by the story and could have his teeth brushed without any trouble. I could tell he could imagine every detail in his mind by his facial expressions.
Eventually, he could brush his teeth on his own.

However, we continued to make stories together every day. It became our very precious time together. A few years ago, I began to put the stories down on paper and eventually get a few published.
Five artistic students at our school have done the artwork for four of my books. They are amateur artists, but the work is not amateurish! The publishing process became more rewarding when I collaborztudents. I'm presently working with more than 10 students now.
Please enjoy my books in the library or on Amazon. By the way, I need more artists. If you would like to work on a book together, please contact me! (s-hatfield@sendai-shirayuri.ac.jp)

『Crisis Narratives, Institutional Change, and the Transformation of the Japanese State.』

Sebastian Maslow and Christian Wirth eds.,　State University of New York Press.

グローバル・スタディーズ学科　講師　セバスティアン・マスロー



少子高齢化、経済成長の鈍化、拡大する財政赤字、東日本大震災、コロナ感染拡大、中国の台頭、北朝鮮によるミサイル・核兵器開発など、1990 年代以降の日本は多くの危機に直面してきた。本書では、国内外の政治学、社会学、公共政策、国際関係論を専門とする筆者らが、現代日本における国家の停滞をめぐる認識や危機感はどのように変化したのか、たとえば「格差社会」、「失われた 20 年」、「国難」のように語られる国家の危機にもかかわらず、実際の政策がいかに乖離しているかを分析する。その上で、筆者らは、政治的介入の正当性と有効性を測り、危機の言説形成の過程に着目している。このように、本書は様々な政策領域を越えて、変わりゆく日本の政治的・社会的・経済的制度の変化のダイナミズムを描き出す。

『世界のビジネスエリートが知っている 教養としての茶道』 竹田 理恵 著　自由国民社

健康栄養学科　准教授　鈴木 寿則

私が、この本を読んだきっかけは、昨年の夏、そして今年の冬に開催されたオリンピックを見ながら現在の「国際社会における日本」に興味を持ったからでした。そんなときに、この本に出会い、帯の「茶道 500 年の歴史はグローバル社会での必須教養。」に魅かれ、すぐに手に取りました。また、表題の「ビジネスエリート」というイメージのカッコよさに対する「あこがれ」があったかもしれません（笑）。

さて、この本は茶道に対するいわゆるハウツーものではありません。もちろん作法についても述べていますが、それよりも、なぜ茶室の入り口である躙り口（にじりぐち）があんなに小さいのか、なぜ畳の縁は踏んではならないのか、それらを、とても分かりやすく解説しています。そして、読む進めていくうちに、わたしたちの祖先が築き上げた日本文化の「おもてなし」、「わび・さび」の心を思い出させてくれるのです。

また茶道をたしなんだ織田信長、豊臣秀吉、そしてスティーブ・ジョブスや松下幸之助などの経営について、日本文化の一つである「禅」を織り交ぜながら、「素直な心」や「シンプルさ」のよさを教えてくれます。

この本を読み終えると「お茶会に行ってみようかな」、「自分たちの日本についてもっと知りたいな」と思うことでしょう。軽い気持ちでも読める、いや、むしろ身構えることなく自然な心で読んでいただきたい一冊です。

『ジャッカ・ドフニ 海の記憶の物語』 津島 佑子 著　集英社

グローバル・スタディーズ学科　教授　大本 泉

2011 年、「わたし」は、幼くして亡くなった息子と来たアバシリを再訪します。そして「ジャッカ・ドフニ」（「大切なものを収める家」という意味の、南樺太少数民族ウィルタ語）という少数民族博物館に息子と行った記憶が甦ります。作品は、東日本大震災、アイヌという少数民族への思い、日本にキリシタン弾圧のあった時代（17 世紀）、アイヌの母と日本人との間に生まれたチカ（チカップ）がキリスト者に出会い、ジュリアン一行とマカウを目指して海を渡り、苦難の生を送るといった物語が時空を超えて重層的に紡ぎだされています。津島文学の集大成（遺作）です。

ところで、国際ペン東京大会があった 2010 年、津島さんは女性作家委員会のイベントのパネラーになってくださいました。そのときのテーマが「越境・環境・女性」。『ジャッカ・ドフニ』が、まさに女性が物語り（２人称で物語る方法も獲得）、「海」を介し、時空を越境する物語としてスケールの大きなものになったのは興味深いことです。

津島さんは、白百合女子大学英文科第１回生です。太宰治のお嬢さんです。生前、マリ・フィロメール様（仙台白百合短期大学英文科の創設者）にも大変お世話になり、感謝しているとおっしゃっていました。『ジャッカ・ドフニ』にも、白百合の学び舎で得たものがたしかに刻まれています。

津島文学に対する海外の評価も高く、筆者は津島さんのノーベル文学賞受賞を期待していました。

皆さんも、ぜひ読んでみてください。

新着図書紹介

『はい、さようなら。』　瀬戸内 寂聴 著　光文社

昨年他界されたことが記憶に新しい瀬戸内寂聴さんは、作家であり天台宗の尼僧でもあった。岩手県の天台寺住職時代に、荒れた寺の復興のため週末に青空説法（天台寺説法）として法話を説いたところ、これが話題となり、各地から参拝者が訪れるようになる。その後も寂聴さんが長年続けていた京都嵯峨野にある寂庵での日曜法話には、全国から悩める人たちが集まってきた。

本書は、『女性自身』に連載された「寂聴　青空説法　京都寂庵編」10 年分の法話から寂聴さん自身がセレクトし、再編集・加筆したものである。

「涙も老いも、ここに捨てて帰りましょう！」

寂聴さんの法話を聞いた者は、皆、笑顔で帰路に就いたという。法話の話題は、挑む・信じる・覚悟する・人を思いやる・あきらめない・美しくなる・愛する各極意やユーモラスな日常等々、そのとき集まっていた参拝者の反応によって縦横無尽に展開された。参拝者の笑いや寂聴さんの脱線も含め、寂聴さんが語り尽くした人生の極意が、この 1 冊に凝縮されている。

さすが作家の寂聴さん、法話が「スッ」と心に入り込み、そして温かい。これが寂聴法話の真骨頂であろう。

（図書館事務長　石岡　宏美）

『ブラックボックス』　砂川 文次 著　講談社

第 166 回芥川賞受賞作品。文書を自転車で運ぶバイクメッセンジャーの仕事をしている主人公、佐久間亮介。配送先へ急ぐ佐久間が、急に左折してきたベンツを避けるために転倒する疾走感のある描写から始まり、その後戻った営業所での同僚たちとの日常会話やアルバイトで知り合った女性との同棲生活の様子などが生々しくリアルに描かれる。その後場面は一転して留置場・刑務所内での生活に移り、佐久間の独白により刑務所に入ることになった理由が明らかになる。いつも「ちゃんとしなきゃ」と思いながらも将来の見通しの立たない単調で不安定な日々の中、憤懣や苛立ちを抑えきれなかった佐久間が、刑務所での囚われの生活により強制的に自分と向き合わされたことで初めて見えてきた物とは何か。内容の重さに反して、目に見える様な精緻な描写で世界観に引き込まれること必至。現代の純文学ともいうべきか、著者の半自伝的小説と思われる作品です。

（図書館主任　谷藤　大介）

『処方箋のないクリニック』　仙川 環 著　小学館

医療技術が進んだ今日でも病気や病院探しで悩む人は数多い。

医師の青島倫太郎の元へは病気問題で困り果てた人たちがやって来る。しかし、彼の少々風変わりな格好を見て皆、診療を躊躇してしまう。

最初は、これが病気の診療？と首を傾げるが、彼のマイペースで柔らかい対応は患者や家族の頑なな心を和らげ、確実に解決に導いていく。

この本の中で起こることは身近な問題ばかりで他人事とは思えない。運転が危うい高齢の父親、遺伝子検査に執着する婚約者、仕事のストレスで体調が優れない男、娘のアトピー治療のために民間療法を信じる母親……。医療系の小説でありながら先端医療や技術を披露する場面は全くないが、医師と病気で悩む人々との信頼関係の重要さを倫太郎の人柄を通して見ることができる。毎回登場するちょっとしたスイーツも固まった心を開くきっかけとなっている。

この物語のキーワードは「第三者」であり、行き詰まった時こそ、青島倫太郎のような名医と出会いたいと思える小説である。

（図書館　浅岡　京子）

図書館が行ったコロナウイルス対策の概要および環境整備の取り組み

2021 年度も新型コロナウイルスのデルタ株、オミクロン株等の変異種により断続的に感染者数の増加がみられ、図書館はコロナウィルス感染対策として徹底した館内の消毒とソーシャルディスタンスの確保、来館者の検温を行っています。また図書館では館内の居住性の向上のため大幅なレイアウト変更を行いました。手に取りやすい新刊図書のコーナーやソファー、就職関連に関する本の設置、図書館入口周辺の美化など、学生が利用しやすい環境を整備しましたので是非お立ち寄りください。

編集後記

2021 年度図書・地域貢献研究委員会および図書館編集図書館報「Fons Sapientiae」第 22 号をお届けします。

2021 年度同委員会では、本学で開催される 2021 年度（第 40 回）日本カトリック大学連盟図書館協議会総会の準備と寄稿文集『仙台白百合女子大学　東日本大震災の記憶』の編集の成功を主な目標として展開してきました。コロナ禍に苦しみましたが、本を読むチャンスにもつながります。図書館員の創意工夫により、館内の環境整備を行うことができました。

本図書館報は、上のような記録をするとともに、図書館をできるだけ多くの学生・教職員・地域の方々に一層利用してほしいという思いをこめて編集しました。個々の学生、教職員の生の声を綴っていただいておりますので、ぜひご高覧ください。

2021 年は、仙台白百合女子大学創設母胎のシャルトル聖パウロ修道女会創立 325 周年、本学創立 25 周年記念の年でした。これを機に気持ちを一新させて、本学図書館も開かれた図書館として進化し続けていく所存でございます。

今後ともご指導・ご鞭撻賜りたくよろしくお願い申し上げます。（大本）

障がいのある方へ　障がいを持つ方の図書館利用に関する質問や案内、サポート等に対応します。
希望する場合は図書館スタッフにお申し出下さい。図書館は、バリアフリー設計となっております。

図書館報バックナンバー　http://sslibrary.sendai-shirayuri.ac.jp/

Fons Sapientiae 仙台白百合女子大学図書館報　No22　2022 年 4 月 1 日発行　仙台白百合女子大学 図書・地域貢献研究委員会　〒981-3107 仙台市泉区本田町 6-1
tel 022-374-5090　fax 022-374-4577　e-mail: library@sendai-shirayuri.ac.jp
図書・地域貢献研究委員会：大本泉　岡敬一郎　志水田鶴子　三浦和夫　鈴木寿則　　図書館職員：石岡宏美　谷藤大介　須藤清美　浅岡京子　菅原陽子　浜口美和